

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ  
2022年2月13日(日)

主 題：「喜びがみちあふれるため」  
—永遠のいのち—

テキスト：第一ヨハネの手紙1章1～4節

### はじめに

- ・今日から、私たちはヨハネの手紙第一書簡から学んでいきます。

この手紙のはじめは次のように書かれています。

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目を見たもの、じつと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。

同じような文章の書き出しはヨハネの福音書1章にもみられます。

1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。

ことばは神であった。 ヨハネ

#### 1) 手紙の著者；

この二つ書簡には、共通した文調があります。それは著者が同じヨハネであったからでした。イエスの12弟子の一人であったヨハネでした。ヨハネはこの後、ヨハネの黙示録を書きました。ほとんどの弟子たちが殉教の死を遂げた時代、ヨハネはパトモス島へ流されました。

- ・そして神の特別な加護の下で、あのヨハネ黙示録を書き残しました。そのヨハネが、この書簡の著者でした。多くの聖書学者は似たような書き出しであるこの二つの書簡は、12弟子の1人であったヨハネによって書かれてと考えています。

#### 2) 手紙の宛名；

ヨハネは「私の子どもたち」、「愛する者たち」、「小さい者たち」、「兄弟たち」と呼んだ人たちが、書簡の受け取り人です。つまり彼が愛してやまなかった人々でした。この人たちはイエス・キリストを信じ、キリストにお従いしようとしていた人たちでした。彼らは小アジア（現在のトルコ）に住んでいた聖徒たちでした。しかし、彼らを取り巻く環境は闇のようでした。

#### 3) 手紙の目的；

ヨハネはどんな目的でこの書簡を書いたのでしょうか。手紙を書き送る背景には、必ず目的があります。ヨハネは彼が生きていた時代を、2章18節で「終わりの時」と言いました。

2:18 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。

ヨハネは「反キリスト」、「惑わそうとする人たち」、「にせよ預言者」が予告されたとおり、出現してきた、と言いました。

- その頃は「グノーシス派」というグループの人々が登場し、イエス・キリストが人間の姿をとり、この地上に来られたことを否定しました。つまりメシアの受肉を否定しました。

- ヨハネは愛する者たちが異端の教えに負けるのではなく、この世に勝利する者となることを願い（祈り）、その目的でこの書簡を書きました。彼はヨハネ2章において、父たち、若者たち、幼子たちに次のように書きました。

2:13 父たち。私があなたがたに書いているのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。若者たち。私があなたがたに書いているのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

2:14 幼子たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが御父を知るようになったからです。父たち。私があなたがたに書いてきたのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。若者たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが強い者であり、あなたがたのうちに神のことばがとどまり、悪い者に打ち勝ったからです。

- ヨハネは愛する者たちが勝利の生活を送るために、実に明白（ストレート）に語りました。勝利の生活を送るために、ヨハネはいのちの源であるお方イエス・キリストを指し示しました。そして、どうすれば、たましいが健康で恵まれるかを説いたのです。
- さらにヨハネは実際の生き方を指し示しました。信仰は歩みとなって外に現れるものであることを強調しました。ですから、この書簡の受け取り人は多くの励ましを受けました。

- 皆さん。このように読み進んでいきますと、この書簡は今の時代の私たちにも大切なことを語っていることが分かります。そこで今日はその一回目の説教として、著者ヨハネが愛する者たちに最も伝えたかったことを学びたいと願います。テーマは、「喜びがみちあふれるため」です。 2点

### 大切なポイント

#### 1. 永遠のいのちであるお方

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目を見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。

#### 1) ヨハネのキリスト観

では、そのキリストとはどんなお方でしょうか。

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目を見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。

① 「初めからあったもの」

すなわち神が天地を創造された時、すでに存在しておられた方です。

このお方は永遠なるお方です。天地創造の神です。

② 「聞いたもの、自分の目を見たもの」です。

ヨハネはイエスの側でじかに耳で聞き、肉眼で見、そして今でもその印象がはっきり心に残っているお方でした。それは人となって来られたイエス・キリストです。

さらにヨハネは言いました。

③ 「じっと見つめ、自分の手でさわったもの」でした。

ヨハネは自分が本当に観察し知っているお方（メシア）である、と述べました。

- ・ヨハネはイエスと生活を約3年間ともに過ごし、最後の晩餐の時にはすぐ近くに同席していました。イエスの近くにおいて、キリストが語られたおことばに耳を傾け、イエスが成されたみわざを実際に目撃し経験していしました。
- ・ですから、当時のグノーシス派の人たちのように、頭で考え、理性的に理論化した教えではありませんでした。キリストの十字架を見、また墓から復活されたキリストに接したのです。ですからヨハネは、キリストは神ではないと主張するグノーシス派の人たちを許すことはできませんでした。このヨハネのキリスト観ほど、強い信仰はないと思います。
- ・ヨハネにとって、キリストは単なるあこがれた空想の産物ではありませんでした。神が人となられ「現れて」くださり、人間の手でじかに触ってみることができる存在となられたお方であることを実体験しました。
- ・皆さん。ヨハネはこのようなキリスト観を持っていましたが、私たちはどのようなキリスト観を持っていつているのでしょうか。

## 2) 永遠のいのち

1:2 このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。

- ・私たちは、「命」が大変貴重であることは十分承知しています。とくに今の時代、コロナ感染症により多数の人々の尊い「命」が失われています。その危険性は、誰もが実感しているところです。しかし聖書はこの肉体的生命と同時に、もっと大切な「いのち」を私たちに指し示しています。
- ・ヨハネはそれを「永遠のいのち」と言いました。ヨハネが読者に伝えたかった

のは、この「永遠のいのち」そのものがイエス・キリストであることです。キリストの存在は「永遠のいのち」そのものです。それは私たちに与えられる「永遠のいのち」の源であります。

- 皆さん。人間が持つ願いの一つは、神の姿を見たいというところにあります。そこで、人間はさまざまな自分の手によって神々を造り出してきました。それが偶像です。
- しかし、まことの神が人の姿をとり、地上に現れてくださいました。ヨハネはそのお方を直接見たのでした。人類はその時、人類始まって以来の最大の事件に遭遇しました。そして人類は、まったく新しい時代を迎えました。
- このお方こそ、「いのちのことば」、「いのち」、「永遠のいのち」であるイエス・キリストです。ヨハネはこのキリストを読者に伝えたかったのでした。それが、ヨハネが伝えたかった大切なポイントです。
- つづいて、ヨハネは永遠のいのちであるイエス・キリストに従う者の生き方を述べました。

## 2. 喜びがみちる人生

1:3 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです

### 1) 私たちの交わり

- 私たち人間は、アダムとエバの神への反逆以来、神と断絶の関係に入っていました。神との交わりが切れてしまいました。人間は本来、神に似せて造られた存在ですから、創造神の姿を見たいという願いを持っています。
- 人間はそのために多くの宗教や神学やイデオロギーを作り出し、今日に至っています。しかし、地上のどんな優秀な人物であっても、どれほど努力を重ねても、それらによっては真の神を見出すことはできません。神ご自身が自らその姿を現し、示してくださるまでは、人は神を見ることはできませんでした。
- 感謝すべきことは、創造神は約2千年前にイエス・キリストをこの地上に送り、ついに神を拝見することを良しとされたのです。イエスは愛する人たちに次のように語られました。 **ヨハネの福音書**

14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。

14:7 あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになり

ます。今から父を知るのです。いや、すでにあなたがたは父を見たのです。」  
14:8 ピリポはイエスに言った。「主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」

14:9 イエスは彼に言われた。「ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください』と言うのですか。

- この「交わり」という言葉は、「共有する」、「分かち持つ」という意味があります。この場合は「キリストの命を共有する」という意味です。クリスチャンになるとは、キリストのいのちを共有する関係に入れていただくことです。

#### 1 コリント人へ手紙 1 章

1:9 神は真実です。その神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられたのです。

#### ① 縦の関係

ここで大切なことは、先ず縦との共有関係です。

縦の関係とは、イエス・キリストと自分の関係です。

#### ② 横の関係

クリスチャンとクリスチャン同士の共有関係です。その関係は発展していきます。そしてその内容は、経験の分かち合いから始まり、持ち物の分かち合い、喜びや悲しみの分かち合い、と具体化していきます。

#### 『例 話』

- 1970年代から80年代、私は旧東欧諸国への伝道をしていました。それらの国々はいわゆる「鉄のカーテン」と呼ばれ、無神論主義イデオロギーの支配下にありました。そこで多数のキリスト教会と聖徒たちが、はげしい弾圧とあ迫害を受けていました。
- 私はそのような国々の兄弟姉妹との交わりを通して、本当に多くのことを教えていただきました。今から考えると、それは主の大きなご計画の下にあったことを覚えます。
- 初めの頃は彼らへの必要物資（聖書、信仰書、食料品、生活必需品等）を、迫害下に置かれた聖徒たちへ届ける奉仕が大きな務めでした。しかし回を重ねて交わりを深めていく中で、それだけではないと知りました。それは彼らから受ける霊的祝福でした。 第2コリント人への手紙

8:14 今あなたがたのゆとりが彼らの不足を補うことは、いずれ彼らのゆとりがあなたがたの不足を補うことになり、そのようにして平等になるのです。

- 豊かな国の豊かさを、苦しみの下にあった兄弟姉妹に分け与えたことは、日本の教会ができたことでした。それによって、私たちは多くの霊的祝福をいただ

きました。彼らとの「交わり」は、夜11時になっても12時過ぎても、終わることなく続いたことを覚えています。みな家に帰ろうとしませんでした。主にある交わりが喜びであったからでした。

- ・それは使徒の働き2章に見る、初代教会のような姿でありました。そこにクリスチャンと教会の横軸の幸いを教えられたのでした。

- ・皆さん。少し考えてください。

イエス・キリストとの縦の関係、そして兄弟姉妹との横の関係が、そのように発展していくならば、そこにキリストの教会の姿が見えてきます。ヨハネはこの書簡の受取人に、そのような交わりに入ってもらいたいと願いました。

#### ヨハネの福音書 15章

15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。

- ・私たちはみな、元木であるぶどうの木の枝です。枝の働きは実をを結ばせていただくことです。

## 2) 私たちの喜び

- ・イエス・キリストを信じる者が、そのような縦と横の関係において、主にあって幸いな交わりに生きるならば、そこには真の喜びがあります。

ヨハネは次のように述べました。

1:4 これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。

- ・クリスチャン生活とは、イエス・キリストにあって、互いの喜びが「みちあふれるため」です。いのちは、もともと私たちのものではありませんでした。与えられたもの、キリストのものであるように、喜びもそうです。

- ・しかし現実の私たちの姿はどうでしょうか？

悩み、問題、葛藤、戦いが多くあります。ヨハネがこの書簡を書き送った小アジアの聖徒たちもそのような環境でした。いのちを持つ人は、どんな場所、環境、立場にあっても、内側からわきあがる喜びを持っています。そして、その場所を喜びの場とします。

- ・では、何が問題でしょうか。

➡ 人です。人が問題です。創造神から目が離れているところが問題です。

- ・喜びはいのちの副産物です。いのちがあるところには、喜びがあります。しかし、命を持たない人の内側から出てくるのは、死のにおいでであり、そのような人々はそこを死の場所とします。

- ・私たちも当時の読者と同じように、肉眼でイエス・キリストにお会いしたこと

はありません。しかし、私たちも主イエスとの縦軸の「交わり」と、兄弟姉妹との横軸の「交わり」に入ることができます。そして、その喜びにあふれる者とさせていただくことができます。それは神からの贈り物です。

## ま と め

主 題：「喜びがみちあふれるため」

—永遠のいのち—

- ・今朝も、主は第一ヨハネの手紙1章の冒頭部分を通して、私たちにお語りくださいました。天地を創造してくださった神が与えてくださった、大きな喜びを教えられました。
- ・それは神を信じる者がいただく「永遠のいのち」です。やがて神の国に入るといふ幸いです。それはイエス・キリストの十字架の救いによります。私たちのわざでも功績でもありません。ただ主からの一方的な恵であります。私たちはこのことを喜び、感謝しようではありませんか。
- ・ここに、今日にメッセージのまとめとして次の聖句を引用します。
  - 1:3 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです
  - 1:4 これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。

\* God bless you !